

伊藤了子さんのこと

とう うら
東 浦 弘 樹

私は伊藤了子さんほどやさしく頼り甲斐のある女性を知りません。

私が心から敬愛していると言える年上の女性は、伊藤さんとフランスで私の指導教授であったジャクリーヌ・レヴィ＝ヴァランシ先生だけです（もうひとり挙げるとすると、ピッコロ演劇学校本科の主任講師であった本田千恵子さんですが、本田さんは「年上」ではないので除きます）。

伊藤さんはとっつきの悪い人です。一見ぶっきらぼうで無愛想にみえるので、ひょっとすると誤解を受けることもあるのかもしれません。しかし、深く知ればこれほど素晴らしい人はいません。

私が最初に伊藤さんを意識したのは、私がまだ大学院生だった頃——「フランス語を考えるつどい」で伊藤さんがフランス語のつづりの読み方の教え方について発表したときのことです。私にとって伊藤さんは名前しか知らない先輩でしたが、若気の至りで「ナポレンとかマリー・アントワネットとか、学生が知っていそうな人名を並べてつづりの読み方を教えてはどうですか」と質問しました。伊藤さんは「では、東浦さんがそういう教材を作ってください」と答えました。今にして思えば当たり前の返答だったと思いますが、そのときの私は「なんだかおかかない人だな」と思ってしまいました。

それから月日は流れ、1991年、私が関学商学部のフランス語の専任講師になったとき、全く同じタイミングで伊藤さんは大手前大学から関学文学部に移って来られました。その意味では、こと関学に関しては、伊藤さんと私は「同期生」ということになります。しかし、学部が違う悲しさで、これといった接

点はありませんでした。

その頃、私は文学部の中川努さんと一緒に『コレクション・フランス語 4 話す』というフランス語の参考書を作り、親しくさせてもらっていました。あるとき中川さんが伊藤さんと3人でスキーに行かないかと言い出しました。私はそれまでスキーというものをしたことがありませんでしたし、もっと言うならそういう「軟弱な」ものは「ケツ」と思っていたので少しためらいましたが、中川さんが「スキーは向こうで借りればいい。ウェアは貸してやる」と熱心にすすめるので行くことにしました。

中川さんが伊藤さんの車を運転して、われわれは兵庫県の千種^{ちぐさ}スキー場へ行きました。初めてですから当然、何度もコケます。帰り際、伊藤さんが私に「初めてのスキーはどうだった？」と尋ねました。私が「いやあ、大変でしたけど面白かったです」と答えると、伊藤さんは「そうなの？ スキーが嫌いになったかと思った」と言いました。それほどコケまくっていたということなのでしょう。

その後も2、3度、同じような形で千種へ行きました。実に楽しい経験で、「スキーなんて……」と思っていた私も考えを改めました。しかし、残念ながら、それ以上は続けられませんでした。1995年1月17日未明、阪神淡路大震災が起こり、中川努さんが亡くなったからです。

正直、あのときのことは断片的にしか覚えていません。たしか関学で震災の犠牲となった関係者の合同葬儀に参列した後だったと思います——教員数名で甲東園の寿司屋に行ったことがありました。たまたま私は伊藤さんの隣に座ったのですが、いろいろ中川さんの思い出を話しているうちに、ふと伊藤さんが「中川さんはずっと東浦さんを文学部に欲しいと言っていた。優秀な人だから、早く取らないとよそに取られてしまうけれど、ポストが空く当てがないので残念だと言っていた」と言いました。

私としては全くあずかり知らぬことで、「そうだったんですか。ありがたいことです」と答えましたが、その後さりげなく手洗いに立って、トイレの中で号泣しました。中川さんが私のことをそんなふうに思ってくれていたのが嬉し

かったからです。そして、それを知ることができたのは、伊藤さんのおかげだと思います。

伊藤さんはそういう人です。思いもかけぬときに、思いもかけぬことを言われて、心が揺さぶられる——私は伊藤さんと一緒にいて何度もそういう経験をしました。

その後、私は2002年に文学部に移籍し、伊藤さんと親しく交わるようになりました。図らずも中川さんの望みが叶ったというべきでしょうか。

当時の仏文は、海老坂武さん、曾我祐典さん、中谷拓士さん、伊藤さん、オリヴィエ・ビルマンさん、私という布陣でした（海老坂さんは一年で定年退職なさり、後任として博多かおるさんが来られました）。自由で、なんでもやりたいことができる素晴らしい環境でしたが、それでも嫌なこと、困ったことというのはあります。そんなとき、話を聞いてくれて助けてくれたのは、伊藤さんであり、ビルマンさんです。私は何度伊藤さんに電話をかけたかわかりません（ついでに書いておくと、伊藤さんと妹さんは声がそっくりです。私は伊藤さんに電話をかけるたび、受話器をとったのが伊藤さんなのか妹さんなのか少し迷ってしまいます。ちなみに伊藤さんに言わせると、私と私の息子も声がそっくりだそうです）。

私はアミアンで博士号を取ったとき、指導教授であったジャクリーヌ・レヴィ=ヴァランシ先生に *Vous ne pouvez pas vous débarrasser de moi si facilement* と言いました。「そう簡単に私を厄介払いすることはできませんよ」という意味です。

いま、伊藤さんにも同じことを言いたいと思います。

仏文では定年退職なさる先生には、名誉教授になっていただき、大学院の授業を担当していただくのが通例です。しかし、われわれがどれほど勧めても、伊藤さんは「ふつうのおばさんに戻りたい」（若い方のために解説しておきますと、これは歌手の都はるみが引退する際に言った言葉です。さらに遡れば、

これは「ふつうの女の子に戻りたい」というキャンディーズの引退の言葉のもじりです）と言って、どちらも固辞しておられます。かろうじて BAEF の退職記念号を出すことだけは了承してもらいました。だからこの文章を書いている訳です。

伊藤さん、ビルマンさんが退職なさると、私が仏文で一番の古株ということになります。なんとか仏文のよき伝統を継承していきたいと思いますが、全く自信がありません。それどころか、伊藤さん、ビルマンさんがいなくなれば、誰に相談を持ちかければいいのかさえわからないというのが実情です。

伊藤さん、どうぞこれからもよろしくお願いいたします。

Tu ne peux pas te débarrasser de moi si facilement, parce que j'ai toujours besoin de toi.

（文学部教授）